

伊方原子力発電所の事故は、いつ起きてもおかしくありません

四国電力による伊方発電所の地震・津波対策（抜粋）

（出典：わたしたちとエネルギー 四国電力）

中央構造線の活断層について	→	最大地震の想定を 570ガル （*注）として安全性を確認
南海トラフ巨大地震の影響	→	伊方発電所の直下まで想定震源域が拡大されたが、深さが35～40Kmあるため大きな影響なし
地震による津波対策	→	伊方発電所で想定される最大津波を海拔4.3mと想定し、非常用発電装置等安全上重要な設備は海拔10mの高さに設置
その他	→	耐震裕度2倍 の確認・電源の確保

これで本当に安全なのでしょうか？

伊方発電所の1～3号機の運転開始時期と経過年数

（出典：わたしたちとエネルギー 四国電力）

	1号機	2号機	3号機
原子炉形式	加圧水型軽水炉	加圧水型軽水炉	加圧水型軽水炉
運転開始時期	1977年9月30日	1982年3月19日	1994年12月15日
経過年数	約35年	約31年	約18年

上記からわかることは1、2号機の原子炉の高経年化・老朽化です。

原子炉は、運転中、常時核分裂から発生する中性子にさらされます。中性子が原子炉容器や配管にあたって金属材料を傷つけることがわかっており、特に経年劣化の進む1、2号機ではその劣化が著しく、容器等の金属がもろく、硬くなり、事故等で緊急に原子炉容器を冷却する場合には、容器の内外温度の差によって容器が破損する可能性が指摘されています。

（ガラスコップに熱湯を入れるとコップが割れる事象と同じ）

（出典：原発を終わらせる 岩波新書）

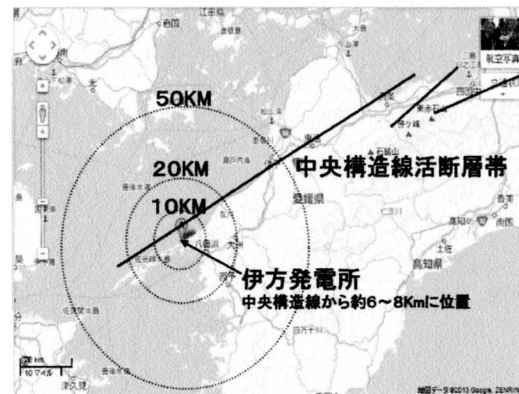
～伊方発電所のある場所～

伊方発電所の目の前には世界最大クラスの活断層があります！

伊方発電所は世界最大クラスの中央構造線活断層帯に隣接しており、南海トラフ地震等が引き金になって、いつ巨大地震に見舞われるかわかりません。現在、この活断層の評価は、マグニチュード8程度若しくはそれ以上の地震が推定されており、地震発生の長期確率は国の主な活断層の中ではやや高いグループに属しています。

活断層による地震としては、2008年に起こった岩手・宮城内陸地震（直下型）で、マグニチュード7.2 地震動**4.022ガル**（*注）が記録されています。また、電力会社の想定を超える地震としては、東京電力の柏崎刈羽原発では、2007年の新潟県中越沖地震で、東京電力が想定した**最大地震の2.5倍**の揺れを記録しました。

もし仮に、中央構造線の活断層による地震が起こった場合、発電所が震源から近すぎるため、最初に行う核分裂反応を”とめる”（制御棒を挿入する）ことが、強烈な地震動によりできない可能性が指摘されています。また後続の炉を”ひやす”（緊急炉心冷却装置の作動）作業は、核分裂反応がとまった状態ではじめて有効に機能するものであるため、”とめる”ことができなければ”ひやす”こともできなくなり、福島よりも深刻な事態になります。



（出典：中央構造線断層帯（金剛山地東縁－伊予灘）の長期評価（一部改訂）について（H23.2.18 地震調査研究推進本部）独立法人防災科学技術研究所HP、新潟県中越沖地震を受けた柏崎刈羽原子力発電所に係る原子力安全・保安員の対応（第2回 中間報告）（H21.6.29 原子力安全・保安院）、元原子力安全基盤機構検査院 藤原節男氏の講演（2012.3.11松山市内）、高知大学岡村教授のコメント（四国新聞社HP”沖合走る中央構造線、伊方原発の耐震は”、の文中）より）

（*注）ガルとは・・・地震による地盤や建物等の揺れの大きさを表す加速度の単位（1ガル＝1cm/秒²）